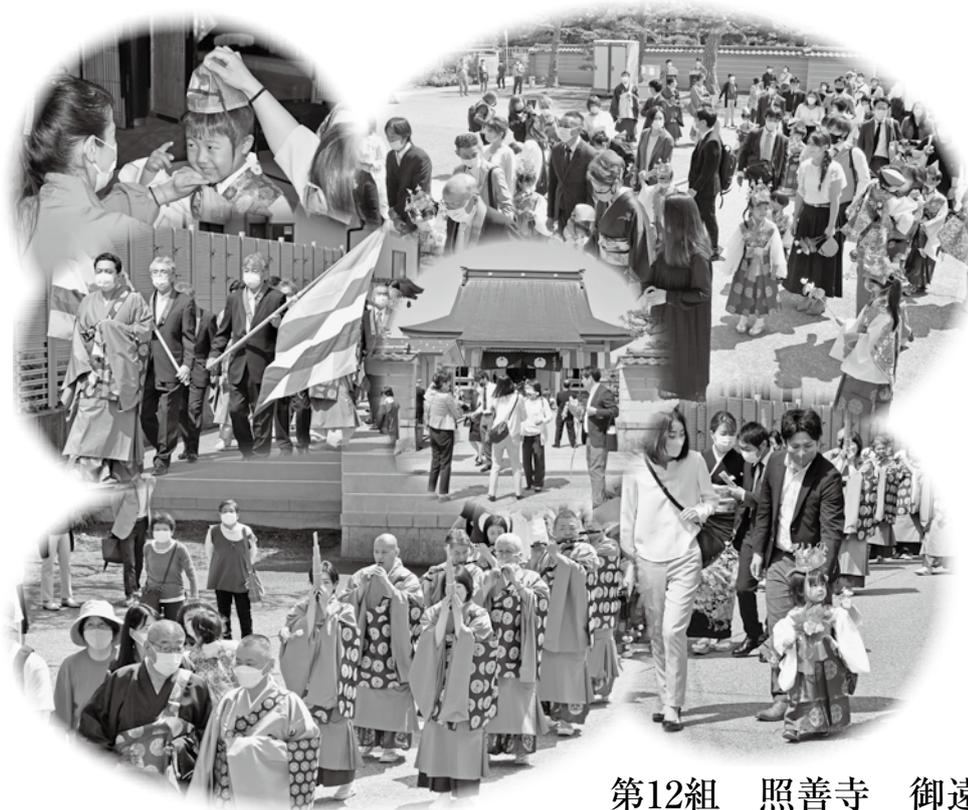


富山如大地

— 第151号 —

発行人 北島 昭彦
発行所 富山市総曲輪2丁目8-29
真宗大谷派富山教務所
編集 富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799
教区・別院ホームページ [富山東別院](#) 検索
教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



もくじ	
・富山教区社会問題研修会講義録 二階堂 行壽氏	2~14
・如大地編集委員の座談会	15~18
・研修会報告	19~22
・書籍紹介	23
・お寺紹介	24
・教区だより	25~28

第12組 照善寺 御遠忌の様子

✽『私』という業縁による存在を省みて✽

コロナ禍になり、三年の月日が過ぎた。この間、私を含め、多くの人々が日常の変化に戸惑い、苦しんでいたと思う。そして大きな変化の中においては、諸々の問題が起きる。

記憶に新しいのは個人の口座に誤って、多額の給付金が振り込まれ、返還されずに使い込まれた事件。メディアでは連日いかに、犯人が非常識で悪人であるかのように報道をしていた。しかしコメンテーターの一人が放ったある言葉が私の記憶に強く印象に残っている。「このような事件がおきたのは行政側が誤って、大金を入金したからだ」この言葉は、私に歎異抄の一節を思い起こさせた。

「さるべき業縁のもよおせば、
いかなるふるまいもすべし」

『歎異抄』（真宗聖典 六三四頁）

犯人の本質が悪だから、犯罪を犯したのでない。誤送金という縁、悪縁があったから、犯罪を犯し、社会的道徳における悪になってしまった。

私たちは業縁に振り回される存在。己の本質が正、悪ということだけでなく、業縁によって世間の善人と悪人、どちらにもなってしまう。そんな危うい立場にいるのが私たちである。

そのことを思うと「慎まなければ」という思いが心に起る。しかし、この思いも明日、心に残っているかどうか。もしかしたら今この時、次の瞬間にも消えてしまっているかもしれない。自分の思い、計らいすら度することが出来ない私。『凡夫』であるとあらためて、思い知った次第である。

第十二組 照善寺 轡田 偉裕

【富山教区教化テーマ】

「なむあみだぶつ」を訪ねませんか？

富山教区社会問題研修会講義録

「なぜ、葬儀をするのか」

東京教区 専福寺 住職 二階堂 行壽氏

私たちの生活様式や時代社会の変化によって「葬儀」という儀式も遷移してきました。変わりつつある葬儀に、「これが葬儀と言えるのか」という声が聞かれます。そこで、今一度立ち止まり、お念仏の歴史に葬儀の願いをたずね、意義を考える必要があるのではないかとこの視点から、富山教区教化委員会社会教化小委員会では、講師に二階堂行壽氏を迎え、「なぜ、葬儀をするのか」をテーマに社会問題研修会を企画しました。

今回の研修会は感染症予防の観点から、富山教務所（講師来所）と第十三組勝蓮寺本堂（インターネット中継）の二会場に分かれて、二〇二二年五月二十三日に開催しました。本誌では、その講義録を掲載させていただきます。

はじめに

ご紹介いただきました二階堂と申します。よろしく願いました。今日は「なぜ、葬儀をするのか」というテーマで話すようにとお

声をいただきました。伺いました。

今ほど幹事さんからお話がありましたように、富山教区では葬儀についての手がかりとなるような資料を今お作りになられているということ、皆さまから意見をいただきながら作っていくという具体的な取り組みが始められていると

のことです。葬儀というのはどうしても具体的な事柄が関係してまいりますので、儀式の一つ一つの事がらも含めて、どのように考えていくのかということに向き合わなければ、なかなか変わっていかない（また伝統された大切な部分を守っていけない）という面もあります。

私の地域（東京）の事情なり状況からすれば、葬儀のかたちはかなり昔から崩れていて、このところのコロナ感染症の影響を含め、さらに大きく崩れてきていると言ってしまうかと思えます。こういう事に対しては、必要に迫られるということも含めて、みんな考えていかなければいけないと思います。

お手元にくつか資料をお配りしておりますが、他でも「葬儀をどうしていくのか」という内容で話すようにお声をかけていただいたり、文章を頼まれたりしておりますので、それをもとに話させていただきます。

私のところ（寺・東京）の状況

先ず、私のお預かりしている寺の状況ですが、寺からご門徒一軒一軒に伺うのに大体一時間か

ら一時間半程度かかります。東京二十三区内約54%（内・新宿14%）、二十三区外の市部約11%、千葉・埼玉・神奈川県が約28%、その他約6%です。門徒さんからすれば、それくらい時間をかけて寺に参られているということですから、日常のところで寺が何を考え、また何をしているのかということが、なかなか見えないことになっているということです。

葬儀についても、こちらから伺って枕勤めやその後の打ち合わせをするということに十分対応できないので、葬儀社にファックスでこちらの願いを伝えていきます。それをご門徒（喪主）に見ていただいて、分からないところは電話で相談しながらという形にせざるを得ません。もう三十年以上前からファックスで葬儀社に指示をしています。最初一枚から始まったファックスが今は六枚になっています。葬儀社の人たちからは、専福寺は厄介な寺だとか、やりにくい寺に当たったというような雰囲気です。ただ、ご門徒さんからは、葬儀社に指示を出してくれているという面で、ある程度喜ばれている面もあります。こういう形でせざるを得ないという面があるという状況です。

「死」は動物にはない

今日のご門徒さんもお案内・参加されておられるということですので、一般的なことの面も含めお話を申し上げたいと思います。

私のところに今は犬はおりませんが、以前は近所の人やご門徒さんが連れてこられて、雑種ですが、何匹も続けてずっとおりました。ある時、二匹一緒にいた時があつて、一匹は老犬でヨタヨタ、もう一匹は若くて老犬に戯れるんです。ある日、前日まではしゃいで飛びまわっていた若い犬が静かにしていました。なんで今日は走り回っていないのかなあと思ったら、大きな木の下で年取った方の犬が死んでいました。犬になったことも動物になったこともないから分かりませんが、自分の身の周りにいた仲間が死んでいけばやはり何か感じ取ることがあるのでしょうか。老犬を埋葬して、若い犬をその近くに連れて行っても近寄らなかつたですね。でも、しばらくすれば忘れて、そこに行って普通におしっこをしていました。ですから、老犬が亡くなったその時には「死」という事がらを犬

も何か感じ取っていたのだろうという気がいたします。

しかし、「死」という事からは動物にはないと言われます。動物は「死」ということを認識していない。「老い」や「病」や「死」が自分にとってどういうことなのか考えることがないということです。ですから、死という現象は動物にも起こりますが、死という事からは人間にしかない、という言い方がされます。

「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」

その私たちも、自分の死については分からないのです。死は全員が必ず体験することになるのですが、体験した時にはもうそれを認識することはできないわけです。

「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」(※)ということがあって、「一人称の死」は自分自身の死ですけど、これについてはもう語ることはできないわけです。分からないということとしかない。

「三人称の死」は、テレビや新聞で接するような死ですから、その時はかわいそうだという思

いもありますが、新聞を閉じたりテレビを消したりして日常の自分の仕事に戻っていかなければならぬ時になれば、もうそのことは自分の外に置かざるを得ないです。

しかし「二人称の死」、愛しい方の死というのは簡単にそういうわけにはいかないと、このことを抱えています。つまり、「二人称の死」ということを通してはじめて私たちは「死」ということを経験し考えるわけでしょう。「あなた・わたし」とこう呼び合い、肌に触れ、言葉を交わし、というような方の死においてのみ、「死」ということが自分の抱える現実の問題としてわき起こってくるということです。

※「一人称の死」(自分の死)、「二人称の死」(近親者の死)、「三人称の死」(他人の死)と「死」を三つに分類したのは、フランスの哲学者ウラジミール・ジャンケレヴィッチ。(二九〇三―一九八五)

人間のはじまりとは

人間というのはいったいどこから始まったのかという定義はいろいろございましょう。私は学者ではないので様々な定義のことを全部は知

りませんが、その中の一つに、「死ということを知ったところから人間が始まる」ということがあるようです。

また、「ザ・ファースト・フラワー・ピープル」ということもいわれるようですが、イラクのシヤニダール遺跡という所でネアンデルタール人の遺骨が出てきて、その周りの土を成分分析した時に、綺麗な花が咲く花粉が非常に多く混じっていたと。これは確実に花を手向けたのであろうということが言われて、「ザ・ファースト・フラワー・ピープル」と名付けられたという事です。

犬とか猫もこれから何千年、何万年とかければ変わっていくかもしれませんが、今のところは人間だけが、死ということを知り、そしてそのことを悼む心を抱えているということです。「一人称の死」を通して、この私もまた同じように生命を終えていくということをはじめて感じ取る。

それが形となっていくのが「葬儀」でしょう。花が手向けられていたということがどういこうとを意味するのか。もちろん別れの悲しみや惜別の念において手向けられるということもござ

いましょう。しかし一方で、やはり同じように自分もまた死していかなければならない事実を抱えているということ、その時にはじめて受け止めたのであれば、そこが人間の始まりであり、また「葬儀」ということの始まりなのかもしれません。

肌で感じる死

死ということを感じ取る場面(事がら)は、いろいろあるかと思いますが、例えば動かれなくなるとか、冷たくなっていくということがありましよう。私は葬儀の時に、亡くなった方の額にしばらく手を添えるようにしております。これはもう三十年以上前に大阪の戸次公正さんから伺って、そうだなと思ひ、行っているのですが。

数年前に伺った葬儀の折に、家族七、八人の葬儀でしたが、出棺の前に花入れをした後、私の方の額にしばらく手を置いておりました。何となく喪主以下全員が並んで額に手を置くようなことになってきました。最後に残った五歳くらいの男の子が、自分もやらなければい



二階堂 行壽氏

1958（昭和33）年、東京生まれ。大谷大学卒業。
東京教区専福寺住職。
真宗大谷派首都圏教化推進本部員。著書に
『亡き方からのメッセージ 一浄土真宗の葬
儀一』（東本願寺出版）など。

けないと思ったのでしょうか、前の大人に続いて額に手を当てて、そして蓋が閉じられ霊柩車にみんなで運んでいくという時に、つまり一分か二分くらい経ってから、もの凄いで泣き始めたのです。それまでは全くはしゃいでいるだけで、通夜も葬儀も何も感じていないような雰囲気でした。まあ、そうでしょうね。はしゃいでいて一切涙ということはありませんでした、そのとき大声で泣き始めた。怖かったのかもありません。何を感じたか分かりませんが、私は「よかったなあ」と感じました。

今この時代の心配なことの中に、ゲームのリセット感覚というものが指摘されました。敗れ、死んでしまっても、ゲーム機をリセットすればまた生き返るといふようなことが、心配の事例として指摘されました。それを考えると、命を終えていくとはこういうことなのだと肌で感じるものが、ある意味大切なことだと思えます。

「順繰りだからナ」

二十年前くらい前でしょうか、ある地方紙にある記事が載っていて、読んでなるほどと思ったことがありました。それは、東大を出て農林水産省に入省して、地方に出向した人が、その町と牛に惹かれて、どうしてもここに住みたいと、農水省を辞めて地方に住まれた方の随想でした。

まだ地方の葬儀事情が色濃く残っている頃だったのでしよう。その地域では、村の人が亡くなるとほとんど全員が一日は仕事を休んで、一週間、交代で

様々な葬儀の手伝いをしていたらしく、東京から行って、他の家の葬儀になんでそんな町をあげて行くのかと驚いたそうです。そして葬儀が全部終わった後、「疲れただろ？」とおばあちゃんに言われて、頷いたら、「順繰りだから、ナ。オレのときも頼むじえ」と言われたと。

その時にその人の中に今まで感じたことのないような安堵感が広がってきたと。自分が死んでも同じように、こういう光景で送られて行くんだなあ、すごく安堵したということを書いておられました。

それまでは、死というものが非常に遠いものだったけれど、みんなで亡くなった方をお送りすることを通して、自分も同じようにこういう雰囲気の中で送られていくのだったら安心だと思えて、ほっとしたということのようです。今までは死が遠すぎて何となく落ち着かなかったものが、死は自分たちの近いところにあるものだということ、かえって安堵感が広がったようでした。

東京の場合特にそうですけれど、見ようともしないことも含めて、死ということを見せないように感じさせないようにする、匂わせない葬

囲気ですね。本当は、失っていかざるを得ないものを抱えていることが事実ですから、そのことを含めて自分の人生をどのように受け止めるかということを考えることもないままにいますらば、はたして人間の本当の安心は得られるのだろうかと思いますが、でもそれが「東京」という名に象徴された場所なのでしょうか。(そのこともあってなのか、悲しみを演出するような葬儀社もあります)

言葉が通じない

もう一点、死ということを感じ取る場面(事がら)のもう一つは、「言葉が通じない」ということです。それまでは(もちろん状況によつてですが)何か言えば相手から返ってくるのが私たちの日常です。しかし、言葉が通じない。投げかけても返ってこない。そういう中に置かれるわけです。

お体が目の前にお姿としてあるうちは、亡くなつてしまわれたと頭で理解はしていても、声をかければ返ってこないかなあという期待も含めて、私たちは返事を期待するわけです。しか

し白骨だけになってしまわれますと、あらためて言葉をかけても通じないのだなということをおぼざるを得ないところに置かれます。

つまり「通じない」わけですが、では生きている私たちがお互いに通じているのか、という問題があります。私の調子がよくて、それから相手の調子もよければ「そうそう!」と言って、何かお互いに気持ちを通じたような気持ちになる時もあります。しかしどうでしょう、そんなつもりで言ったのではないのに何でそう受け取るのかということが出てきたり、逆に、そんな言い方しなくてもいいような時に、ちょっと険がある言い方をしてしまうこともあります。なかなか生きているもの同士でも「通じる」ということは難しいことですね。

死から始まる対話

亡くなられてしまわれますと返ってくる言葉がありません。ですから「通じない」のですが、ある意味でこれが大切なことだと思ふのです。でも、もし相手の願っておられることの一歩深いとこころをこちらが受け止めることができた

したら、それは「通じた」ということになりましよう。

日常生活でもそうですね。相手の人が私の心を深く慮って何かしてくださったとき、私たちは喜ぶわけです。そうすると会話をしなくて相手も意を確かに汲んでくれれば「通じた」ということにもなりましよう。

亡くなられたことは寂しいことですが、亡くなられていても、死ということから始まる対話があるのでないかと思ひます。

ただ、その時の問題は、私たちは自分の思いに引き寄せて考えてしまうという問題があるという事。そしてそれが、仏としての亡き方の声、真実の声ということとしてあるのかという課題です。

亡くなった方を仏さまと、こう呼んでいます。大仏も仏さま、阿弥陀さまも仏さまです。南無阿弥陀仏も仏さまです。私たちは、阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、そして亡き方、みんな仏さまと呼びますが、そのはたらきかけを本当にどのよう受け止めてきているでしょうか。亡くなられたら仏さまと呼ぶことの中身の確かめが、浄土真宗の念仏の教えの中で感じ伝えられてきた

はずですけども、そのことがなかなか伝わっていないということであれば、あらためて一人が確かめていくことが大切なのではないかと思います。

「短い人生だったけど」

お配りしています『短い人生だったけど』という文章。三十年ほど前にお通夜に伺わせていただいた門徒の、一歳のお子さんを亡くされたお母さんの言葉です。朝から晩まで働きづめのご夫婦で、お母さんが一時間おきくらいにベビーベッドの様子を見て、また仕事ということを繰り返していたらしいのですが、ベビーベッドと壁の間に挟まって亡くなってしまわれたようです。

そのお母さんがお通夜で最後におっしゃられたのが、「一歳という短い人生だったけど、彼にとっては大切な一生だったのでしょね」という言葉でした。

人間の思い（情）で考えたら一歳という人生はあまりにも短く、そして親のお母さんからすればあまりにも辛い。しかし、私たちは一歳の

お子さんであっても亡き方を仏さまとこう呼ぶわけでしょう。そういう時に何をもって、仏さまと言っているのかということが私たちに問われます。

説明的な言い方をすれば、今の時代だったらみな何となく八十才くらいまで生きるだろうと、こう思っているけれど、本当は○才で命を終える場合だってある。誰にも分かりません。その分からないということの方が本当ではないですか。決して喜ばしいことではないけれども、事実はそのようなことが起こってくるわけです。それが現実の私たちの生きているのちの事実だということ。そして私たちは自分の思いの中で生きていないことを、もしお子さまの死から受け止められるならば、お子さまは両親にとっては大切なことを教えてくれる仏さまとしてはたらかけておられることになるのではないのでしょうか。

亡くなられた方に向き合う時間全体が「葬儀」

しかし、これは説明であって、簡単に受け止めるというわけにはなかないと思います。五十

回忌をされたご門徒が、親の五十回忌を迎えるまで親のことが許せなかったとおっしゃっていました。小さい時にお父さんが亡くなられて、遺った子供たちは苦労したのです。「親父さへ早く死ななければ、こんなことにならなかったのに」と、ずっと恨み続けてきた。それでも法事は勤めてこられたわけですが、五十回忌になって自分が親の歳を超えて、「親父も子供を置いて死んでいくのは辛かっただろうな」ということを含めて様々な思いがわいて、やっと親のことが許せたというか認められたと言っておられました。亡き方と向き合っていくこと、その向き合っていく中に「葬儀」ということがあるかも知れません。

ですから、実際の葬儀の場でも時間的に区切られた「葬儀」だけではないのでしょうか。『通夜葬儀のころ』（東本願寺出版）にも少し書きましたし、また『名古屋御坊』にも書きましたが、葬儀というと、一応お通夜と区分けをして、通夜と葬儀と言いますが、本当は葬儀式というものは全体、つまり命終、枕勤め、湯灌、そして納棺、通夜、葬儀、還骨、…、その全部が葬儀式です。お別れをしていくとはそんなに簡

単じゃないはずです。そういう時間全体を通して私たちは「死」ということを感じ取ってきたのではないのでしょうか。

別れを味わう

私の母親の命終の時には、最後は家族は家で待機し、私だけ病院に残って病院の待合室のソファで寝ておりましたが、もう難しい状態だということ家で電話をして全員が駆けつけて、死にはみな間に合いました。悲しかったですが、覚悟はしていましたので、その時には、率直な悲しみであったかと思えます。その後、通夜葬儀を行い、そして一番寂しかったのは出棺で参道を通っていく時でした。母は時間があると草むしりをしており、参道も折々草をむしっていた場所で、私は「次に母がここ(寺)に帰ってくるときは、遺骨で帰ってくるんだな」と感じたときでした。

死そのものということだけでなく、その人の人生、もつと言えばその人の日常の生活がどこにあるのかということ。そしてそのこととの別れがあるわけです。これを感じるの一人一人

みんな違うわけで、家族であってもみんな違います。そしてそれをどこで感じるかも違います。通夜の時なのか葬儀の時なのか、一周忌の時なのか、みんなそれぞれです。そういうことの中にあつて別れを味わっていくということを、私たち葬儀に関わる一人一人が、自分自身の体験も含めて、人を失うとはどういうことなのかというのを静かに確かめていくことが大事でしょう。そういう場が「葬儀」なのではないでしょうか。

「情」中心から「教え」中心へ

今の葬儀の状況は「情」が中心です。情は大切なものではありませんが、情だけならこちら側の思いが中心ですから、そこから私たちが教えられるものは一つもない。私たちの自己満足で終っていくことになりかねない。遺った者ができることは、して差し上げたらいいいわけですが、しかし、いま申しましたように、亡くなっていかれた方を仏さまと私たちはお呼びしてきているわけです。そのことをはっきりさせながら、私たちは仏事を勤めていく必要があるのではな

いでしょか。

どこまでも私たちが、「亡くなった人とは」「仏とはいったいどういうことなのか」「それが南無阿弥陀仏という世界とどういう関係があるのか」「阿弥陀さまとどういう関係があるのか」ということを、一人一人の事情も全部違いますが、このように話せば、ということには収まりませんが、私たち一人一人が南無阿弥陀仏と阿弥陀さまとそして亡き方と、どういう関係に見ているのかということがいつも問われていると思っています。

——まよめの講義——

竹中智秀先生の『浄土真宗の葬儀』(東本願寺出版)の中で、「現場からの問題提起」が三人の方からされて、それを受けるかたちで竹中先生がお話をされています。この問題提起がいいですね。特別な地域事情・寺の事情もありましようが、今日も直接何人かのお声を聞かせていただいたり、今も発表いただいたりしましたが、そういうそれぞれが現場で抱え、感じている日常の葬儀・仏事の中での実感が大切です。すぐ



第1会場（富山東別院会館）

に変えられることもあれば、長い時間かかるものも当然あるわけです。そういうことを社会教化小委員会の方々とともに、今日の社会問題研修会にお集りの方々も含めて考え続けていくことが大切だと感じました。

東本願寺仏事サポートセンター東京

さて、たくさんお出しいただいたご質問全部にお答えできるか少し心配ですが、その前に一つだけ。この七月（二〇二二年）から発足する「東本願寺仏事サポートセンター東京」についてお話しさせていただきます。昨年（二〇二一年）四月に「東本願寺仏事サポートセンター福岡」がすでに発足しています。

「サポートセンター東京」の場合は、真宗会館



（練馬）に窓口を置いていますが、仏事の相談、寺院紹介や仏事代務執行を基本としております。そして、ご希望によっては真宗会館でも仏事を執行しております。

九州の場合は本願寺派が多く、博多には大谷派の別院はありません。そして新幹線ができたため、みんな博多に人口が移動している状況です。北海道は別院はありますが、人口は札幌に集中です。それから東北は仙台に。そのようなかたちで近隣の都市部にみんな人口が流れていきます。そして移動された方がどのように情報を得るのかとなると、ほとんどみなインターネットでという時代です。

今度能登教区と金沢教区が一つになるわけですが、もともと金沢におられる方は寺院とご関係がありましたが、能登から金沢やここ富山に出て来られた方となると、もう近隣の知人もいないし親族も少ない。そうなるとう全部インターネットが情報源となるわけです。その時に、お寺を紹介してもらいたいとか、仏事をどうしたらいいかも含めて、仏事についての相談の窓口・サポートが大切になります。特に都市部（地方都市部も含め）で仏事のサポートが必要となっ

てきている状況かと思えます。

そういう時代ですので、この「東本願寺仏事サポートセンター〇〇（地域名）」に連絡すれば、その地域の東本願寺の仏事の情報が得られ、相談ができるというようなことは、全国に要望があるし、必要だと思っております。少し話が横になりましたがこのことを一つだけ加えておきます。

七日参りの大事な意味

さて、それでは今発表いただいたところから少しお話をしたいと思いますが、一つ目は「別れには時間がかかる」ということについてです。私も言いましたし、座談会でもいろいろとお気持ち動いたという方のお話もお聞きかせいただきました。

少し話が違いますけれども、こちらでは当然のことでしょうが、家の、そのお内仏の前ということがあらためて大事なことで最近思っております。東京の場合、七日ごとの参りは現実には不可能に近いです（前記、距離時間の問題で）。そういうこともあって、私が住職になった

時に自分で決めたのは、四十九日までの間に一度は必ず葬家（門徒の家）に伺うということになります。サラリーマンが多いので、どうしても土日になり、七日当日とはいきませんが。

また東京では、初七日の言葉が中心におかれまして、あまり還骨の言葉が聞かれませんが。本来は還骨勤行があつて中陰勤行、つまり初七日（繰上げ初七日）となるわけですが、還骨勤行はお骨になって自宅のお内仏の元に還つてきたというお勤めでありますから、自宅のお内仏の前での意味が大切なわけがあります。

もちろん茶毘にふすまではご遺体が一番大切なわけですし、そしてお骨になられた後は白骨が一番大切な事ならには違いないけれど、でもそれだけが亡き方に結び付いていくものなのかとなると決してそうとも言えないですね。「ばあちゃんここにいつも座っていたなあ」「いつもこれ使ってた」「いつもこれ読んでた」「いつもこれ見ていた」「これはあのおばさんと一緒に行った時に買ってきたあの時のお土産だ」と。家族は忘れていても、親戚の人が集まることで、亡き方の人生が広がっていくという場合もありますね。

やはり今まで葬儀を自宅（お内仏）でやってきたということは非常に大切な意味があるわけですね。今から全部戻すわけにはいかない面がありますが、しかしみなさんの所であればまだ七日参りなどのお参りが残っているということですから、そういう、場所も含めた全体が、その方に触れ直す大きな手がかりであるということが大切なことではないかなと思いました。

また葬儀も家族葬が多くなったので、「式場を借りなくてもいいのでは？」と私は提案します。ほんのわずかですけれど家で葬儀をされる方が出てきました。

寄り添うこと

そして「寄り添う」ということも出されておりました。そうですね、大切なことかとは思いますが、寄り添うということは、本当にはできませんね。申し訳ないことにやはり、他人です。ご門徒の中でも永く深くお付き合いをしてきた方もいらっしゃると思いますが、そういった方たちは、もう二人称です。

しかし、一般的な場合は、三人称になるわけ



第2会場（第13組 勝蓮寺）

で、申し訳ないことですが、本当に寄り添いき
ることはなかなか適いません。できないからと
いつて捨ててしまうわけではなく、その気持ち
は大切なことですが「本当に寄り添えるか？」
「寄り添うとはどういうことなのか」となった
時、どうかと。

よく言われますが、「がんばってね」というこ
とが一番辛かったと。例えば、ご主人を亡くさ



れて、友だちが「悲しんでいるだけでなく、た
まには出てきなよ。一緒に食事に行こうよ」と
なった時、声をかけてくれたお友だちの気持ち
も配慮して「ありがとう」と言って参加するの
ですが、帰ってきてからどっと疲れが出たとお
聞きます。お友だちの前では元気な顔を見せ
ないと失礼にあたるわけです。それが本当に疲
れたという方は何人もいます。これも「寄り添

う」ということには違いはないのですが、なか
なか本当に寄り添うということは難しいことだ
すね。

では、しなくていいのかということではあり
ません。儀式ということでは、肅々と、と
なるのでしようが、長い伝統の中で受け継がれ
たことをしっかり行うことだと思います。ちゃ
んと一緒に正信偈をお勤めし、一般的なことに
なるかもしれませんが、仏教が死や別れという
ことをどのように考えてきたかということをお
伝える。そうやって「場と時間」を共に過ごす
ということなのでしょう。

寄り添うことはなかなかできませんが、その
場と時間を自分にとっても大切な機縁としてい
こうということが、臨終から始まって、枕勤め、
納棺とずっと時間を共に過ごすことの中身では
ないかと思えます。それがどこで終わるのか、
四十九日なのか百箇日なのか一周忌なのか三回
忌なのかは分かりませんが、ちゃんと一緒に正
信偈をお勤めするということです。そういうこ
との繰り返ししかできないのかと思います。

人間の言葉には限界があります。どれほど言
葉を尽くしても寄り添うことは本当に難しいこ

とです。大切な人を亡くした人の前では何も申し上げようがないのです。どんな慰めの言葉であつても、人間の言葉では無理です。静かに頭を下げるしかない場合があります。

後を継ぐ——感じた恩恵の意味

祖母さんから、その後をお孫さんがお継ぎになられたというお話を聞かせてもらいました。

どこでどう繋がっていかは誰にも分かりませんね。でも「自分はこういう恩恵をいただきました」というものが、はっきりしている場合もはっきりはしていない場合でも、しかし何らかのかたちでの恩恵があるからこそ、その方はそれを感じ取って、祖母さんが大切にしてきた仕事を引き受けていこうということになったのかもしれません。その伝えられてきたことの意味を仏の願いとして確かめる場としていくことが大事だと思いました。

寺での葬儀

十三組の会場では、「お寺で葬儀を」という話

題も出されました。これは地域や寺によって、できる・できないもあると思いますが、私どもの専福寺でも、三十年以上前から手軽に寺で葬儀をできるような形を作っております。二十五人くらいしか入れない小さな部屋に野机を置いてやっていますが、今(家族葬など少人数には)はかえってそれが門徒には評判がいいです。

距離が遠い方もいますので、まったく費用をいただかないわけにはいかないと役員との話し合いで決まりました、ある程度いただいています。頼んでとなった場合と比べると、かなり低い費用で済んでいます。そういうことでリピーターが多く、お寺で葬儀をされる方は結構増えていきます。寺としては大変な面もありますが、費用も門徒さんが葬儀を選ぶ要素の一つにならざるを得ない時代になっていますので、なるべくその負担を減らすことも考えていこうと思うことです。

中陰壇の赤飯

十三組では中陰壇に赤飯を備えるということ

ですが、驚きました。大谷派の儀式でいえば百箇日から法事で、そこから蠟燭の色が白から赤に変わりますね。赤飯というのはお祝いのな意味を感じるわけですが、何かを象徴的に表現しているのでしょうかね。蓮如上人は「命日」を「明日」と御文に記しておられますが、もしかすれば、「亡き方を仏として」という考えをみなさんで共有してきたことからはないかとも思います。大谷派の、儀式上での押さえというよりも、その方をどのように受け止めるのかということの地域での一つの大切な表現としてあったのでしょうかね。それは大切だと思ってお聞きしていました。

手で遺骨を拾う

私も、火葬場に行くと、私だけは手で遺骨を拾っています。みなさんには「手で拾ってください」とは言えませんので箸で拾われますが、私は手で拾って骨壺に遺骨を入れていきます。私もそれをやり始めて長いのですが、みんなに驚くと同時に、穢れということはないということ、を、「そういうことなんだな」と感じとってもら

うくらいのことにはなりませんでしょうか。

儀式を共有する

さて、先ほど儀式を儀式としてしっかり行うことだと申し上げましたが、問題はそれが門徒とともに共有できているかどうかということ、そこが一番問題じゃないかなと思います。

みなさんも仏教会でご関係があれば他宗の住職が亡くなればお葬式に行かれるのではないのでしょうか。私は仏教会での付き合いが薄く近隣のお寺としかお付き合いがないのですが、住職が亡くなればお参りに伺います。でも葬儀の内容は全く分からないですね、いま何をやっていめるのか。こちらは一応坊さんなんですけど、いま何の時間なのか分かりませんでした。「ああ、私たちの儀式もそういうふうに見られてるんじゃないか」と思いました。儀式は大切なものですが、それが共有できているのかどうか。昔であれば、そんなこと問わなかったり、また年寄りや地域、門徒同士で伝えていったということもありましょうが、今そういうことがなくなると、儀式が必要か？というところまでになっていっ

ているのでしょうか。

私の友人が亡くなってキリスト教の葬儀に行きましたが、そこでの葬儀は非常によかったです。パンフレットが配られて今日の式次第が書いてあり、そしてみんなで歌う賛美歌が載っていました。私はキリスト教徒ではないので静かに後ろの方でお参りしていましたが、賛美歌を歌う時間、聖書を読む時間、それから神父さんなり牧師さんのお話を聞く時間、そういうのが非常に丁寧に進んでいくのに触れて、「キリスト教の葬儀、いいなあ」と感銘を受けたことがあります。

それから私は葬儀の次第などがある程度記したものを配るようにしました。儀式自体を変えた方がよい部分もあるかもしれませんが、今あるものをちゃんとやっていって、しっかりお伝えするということで場と時間を共有する、それが大切なことじゃないかなと思っています。

「御文」を一緒に読む

ただ、お通夜については次第・順序を変えて行っています。本来、通夜は親族などの近しい

者だけで行い、葬儀は近所の人や友人など、外へ向けての部分としてきた面もあります。しかし、現状（コロナ感染症以前の場合）は、通夜の方が会葬者が多いのが一般的になっています。（※註）

それで私は六時からのお通夜の場合は、家族・親族だけで五時半から通夜のお勤めを始めるようにしています。わずかでですけどその三十分間だけは外からのお参りはシャットアウトして、一緒にとにかく正信偈を読み、それから御文を先に読んで、法話をしてしまいます。それで六時ちょっとすぎるくらいです。

それからお勤め（念仏・和讃・回向）を再開して、親族から焼香し続いて会葬者の焼香となります。そうなれば一般の人を待たせても十分くらいです。普通のかたちでやるとかなりの時間会葬者を待たせることになるので。これはよいのか悪いのか、いろいろな意見があると思いますが、お勤めも法話にも少しは意識を向けていただけるよう、私なりに変えてきたところ。変えてはいけないこと、変える必要がないこと、変えていいこと、変えなさないこと、様々にあると思いますが、試行錯

誤です。

また東京の場合は「白骨の御文」が通夜から読まれます。私は耳から入れるとともに、声を出だすことが大きいと思っているのです。御文は正式には拝聴するわけですが、私は全員に声を出して読んでもらいます。通夜で読んで、還骨で読んで、お内仏に伺った時に読んで、四十九日に読んで。四回読むと大体リズムは分かりますから、だんだんみな声に出します。そういうかたちで身に入れないと、東京などは蓮如さんに非常に縁が浅いものですから、これも本来の儀式とは違いますが、節を付けてみんなで読んでいます。

(※註)

東京では通夜で会葬者が席について通夜の勤めに会うというのではなく、会葬者は焼香し、飲食の接待をするのが一般的。

意味のなごいとは一切ない

新聞にも書きましたが、私は「本願力にないぬれば」の和讃を通夜でも使い、葬儀でも使い

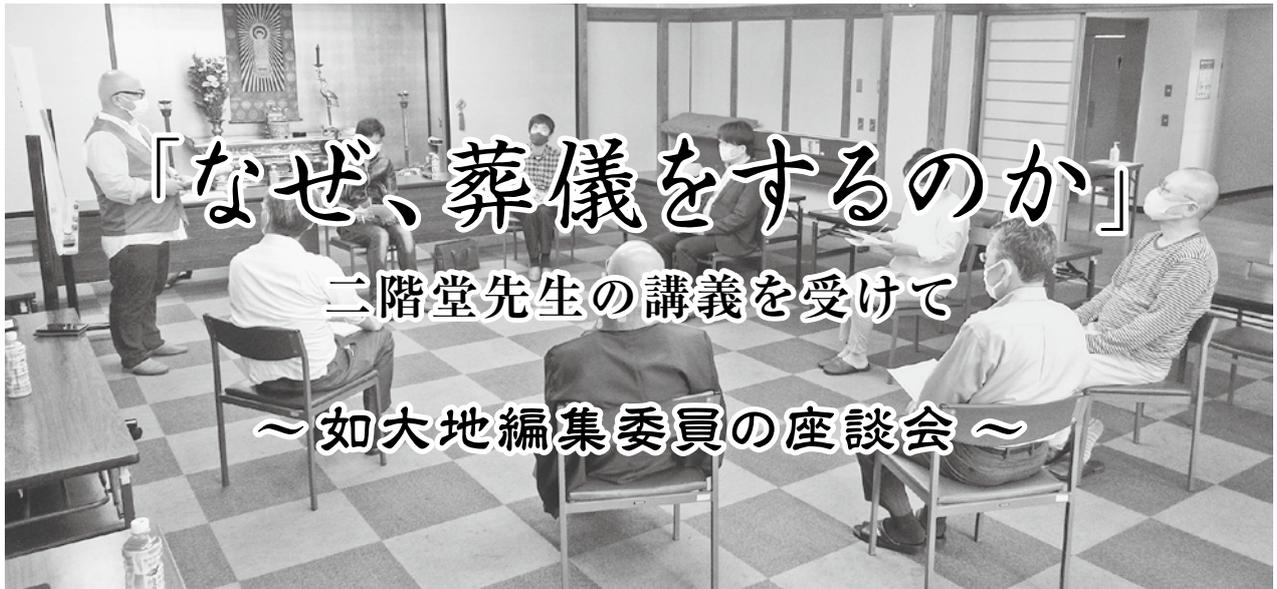
ます。そして一周忌にそれを使った意味をお話します。やはり「空しく過ぎたくない」「亡き方の人生がどのような人生であっても空しいということは一切ない」ということを私たちは言うていかないといけないと思います。どれほど言えているのかは私の課題としてありますが、しかし、これは教えます。

本願は仏さまの願い、誓いですが、人間の願いとは質が違う。人間の願い（欲）は自分の思い通りになること、自分の思いとは裏腹なことには出会わないこと、これが人間の基本的な願い（欲）です。しかし、現実には自分の思いとは裏腹なことを抱えていく、それが老病死であり愛別離苦、四苦八苦です。それでもなおかつその方が生きられたことに大きな意味があり、そして遣った私たちの涙、別れの涙にも大きな意味がある。それぞれ私たちも近い人を見失っていく中で、また多くの仲間、友人、先輩、様々な方の死に触れながら、その「意味のないことは一切ない」ということをどのようなかたちで受け止め、表現できるのかということが、私たちにかけられているのではないだろうかと思えます。

そのことを新聞（東京新聞・中日新聞）では「紙の裏表」というかたちで書きましたが、表面を日常の私たちは磨かざるを得ないのです。少しでも健康に、少しでも若く、少しでも長生きをと。しかし、どんなに磨いたって裏が取れない。紙一枚全部が私たちの一生です。

お子さんから、この世に生を受けても必ず死ぬんだったら生まれた意味がないじゃないかと問いが出されたという文章も時折目にしますが、残念ながら、自分の思いとは裏腹なことを抱えていくのが人生、生きることであり、誕生ということです。その時に、「私たちは悲しいことに命を終えることになったけれども、あなたと別れることになったけれども、この世に生を受けあなたに会えてよかった」と、そういうような眼を門徒さんに伝えなくてはいけないのではないかと思います。これは今生きている私自身が、そう言えるかどうかです。そういうことが今の私たちの方に問いかけていて、そのことを少しでもお伝えできる場となるかが、葬儀の場に願われているのではなからうかと思えます。

(了)



『なぜ、葬儀をするのか』

二階堂先生の講義を受けて

～如大地編集委員の座談会～

先日、開催された「社会問題研修会」の講義（二頁～十四頁掲載）を受けて、あらためて、編集委員で「なぜ、葬儀をするのか」について座談をしました。

死を共に考える場と時間

A ある門徒さんから四十九日のお勤めをするために息子に相談をしたら、「別に納骨をするだけだから儀式めいたものは必要ない。親戚同士で続けていくのもお互いに迷惑になってきている。葬式をしたからこれ以上は必要ない」ということを言われました。その方も「ご縁のあった方の死をとおして人生の節目を共有し法事が勤まってきた」ということを息子さんに言われたのですが、「葬式が勤まったのにほかに死を考

える場を共有していく必要はあるのか」と反論され返答できなかったとのこと。皆さんこのように言われたことないでしょうか。

B 講師は、葬儀の中でのみ悲しみに出会っただけではなく、長い時間をかけてそれぞれに向き合うタイミングがあると話されました。僧侶側が伝えようとする教えの言葉とそれを受け止め

る側の認識やタイミングの差異があるかと思えます。

C 今の発言で、遺族の方々が僧侶の側に何を求めているのかが気になります。遺族の方々はそれぞれに違う感情を持っているのでしょから、それぞれに伝えていくのも難しいですね。

寄り添うということ

A 身近な方の死には寄り添えるが、そうでない方には限界があるということを講師もおっしゃっていました。私も顔を合わせる機会が多い門徒さんのお通夜は仏教のお話以外に、故人との思い出の一面を話すことも多々あります。

B 講義の中にあつた、僧侶から見た葬儀のあり方は一人称（自分自身）、二人称（家族や親しい人）、三人称（生前あまり関わりのない人）というところを言えば、私のところが多いのは三人

称ですね。遠方であったり、ご縁を重ねることが少なかった方に親しい思いを語ることは難しいですね。日頃の月参りなどの関係が希薄になっていくと、なかなか顔を合わせることも無くなり、ごんごん三人称の葬儀になっていくことは、さみしいですね。

A 講義の中でも田舎の葬儀のお手伝いに参加して、へとへとになった女性のお話がありましたね。地域の方々の尽力によって一生懸命に見送ってもらっていることに何かを感じ取っています。しかし、実際には地域の風習で続いてきた一体感を家族間でも残すのが難しくなってきたり。お寺さんに「あとは頼んだら」と託している方も多いのではないかと。

C 「めいば頼んだら」といって聞くと、葬儀も、家の仏教のことも教えてやってくれというところなのでしょつかね。

E 私は仏教のことや真宗の教えを求められているのかとあまの感じていません。それは私たちが僧侶の責任にもあつたのではないかと

実際にお寺が求められているのは求めに応じて葬式や法事を執行してくれることのみになっていないのでしょうか。私は葬儀がその人たちと関わっていくきっかけだと思っていますが本当に意味があるのかと不安になりますね。だから教えるというだけではなく、一緒に話し合っただけでいいことが出来たならばいいなと思います。その中で「南無阿弥陀仏」ということが出てくればと思います。今の葬儀には「南無阿弥陀仏」がないという意見も過去の『同朋新聞』で読んだことがあり、僧侶が遺族の思いを汲んでいくだけの葬儀となるのもおかしいのではと思います。このことを考えながら「南無阿弥陀仏」の教えを伝えていくというのはどうしたらいいのかというところも感じています。

F 私もそのことに同感です。こちらが伝えたいことと、門徒さんがこちらに望むことをすり合わせていく姿が必要なのかなと感じます。

E 寄り添うというのを簡単に言うがちですね。講師も「寄の添ひといはせませ」と言っただけです。寄り添う気持ちは大切だが、寄

り添えると思つのは傲慢になる気がします。(僧侶側が)自己満足な寄り添いになっていないかと自分に問い続ける必要があると思っています。

真宗門徒の葬儀

B 講義の後の座談会で、儀式の執行というところに僧侶と門徒それぞれの目線があるというところが出ました。僧侶の目線では死というものの姿をおしてお念仏の教えを聞いていく大切なご縁を、門徒さんの目線では、僧侶に亡き人のお別れの儀式を粛々と執行することを求めているのかもしれない。同じ場と時間を共有していても「南無阿弥陀仏」が伝わっていないという先ほどの意見に同感です。



F 講義の中にもありましたが、浄土真宗の教えを大切にしたいと思う人がいるから「南無阿彌陀仏」の葬儀をするのであって、そう思っていない方々に対して仏事の葬儀をしても成り立たないと思います。真宗の仏事としての葬儀は御同行・御同行という関係性があればこそ成立するものであって、今の門徒さんにはそれが足りないのかと思います。僧侶側に問題があり、真宗の教えを説こうとすると嫌がられる。今、ある関係性が壊れてしまつのが怖いから、教えを説いていない。教えを聞いてないがお寺を支える家を門徒としているだけです。

E それは私もよく感じます。門徒さんとは言うが本当にそつなのか。真宗門徒って言うが本



当に真宗門徒なのか。それは自分自身に対しても問いかけなんです。「南無阿彌陀仏」が大切だと言つが、その本質が我々僧侶の中でも押えられていないと、いのちを問うということまで働きかけることが出来ないのではないかなと思います。

かつての葬儀、今の葬儀

G 私が生まれた地域では、家で葬儀をするのが当たり前でした。ホールでの葬儀、家族葬の増加を寂しく感じます。私は坊守で葬儀に直接携わるということは少ないのですが、たまたま自坊で葬儀をされた方があり、すごく親しくなりました。それで降任職はどんどんお寺で葬儀をしてくださいとアピールしています。お寺で葬儀をすることですごく繋がりを感じていますが、皆さんのところではいかがですか。

E 以前、ホールが埋まっていて葬儀が出来ない状況の方がおられたので、お寺で葬儀をしないかと提案しましたが断られました。お寺で葬儀をする必要がなくなった。頼むと迷惑がかかる

し、断られることもある。それが怖いので頼めない、だからホールでしますと。隣・近所、地域というコミュニティも崩れてきているのかなと思いました。準備など大変ですが、それにも意味があり大事だったのでないかなと思います。

葬儀をとおして伝えるもの

H 講師は、キリスト教の葬儀の丁寧さに感銘を受けたと話されましたね。参列者の方々に次第の説明等もされ、時間と場を共有するための工夫が見てとれたと。講師は儀式を変えたら駄目なのかもしれないが、変えられるところは変えていますとおっしゃってますね。

C 講師は、葬儀屋さんにしつかりとこちら側の要望をお伝えしていることをおっしゃっていました。葬儀屋さんには時間の配分等も決めたマニュアルがあるのかもしれませんが、こちら側がきちんとした仏事であることを業者さんにも伝えていくのは大切ですよ。

F 私の地域では葬儀が終わりに出棺・火葬をする前に初七日法要をする風習がありますが、これを私はやめました。本来は火葬が終わってお骨になって、初七日の期間を経過してから執行することに意義があることから、そうすることにしました。これに対してご門徒の皆さんからも疑問の声は出ており、たまに心が折れそうになりますよ。

G 本来ならおかしいことなんです、続いてきたことに単にお寺も乗っかっている実情があるんですね。

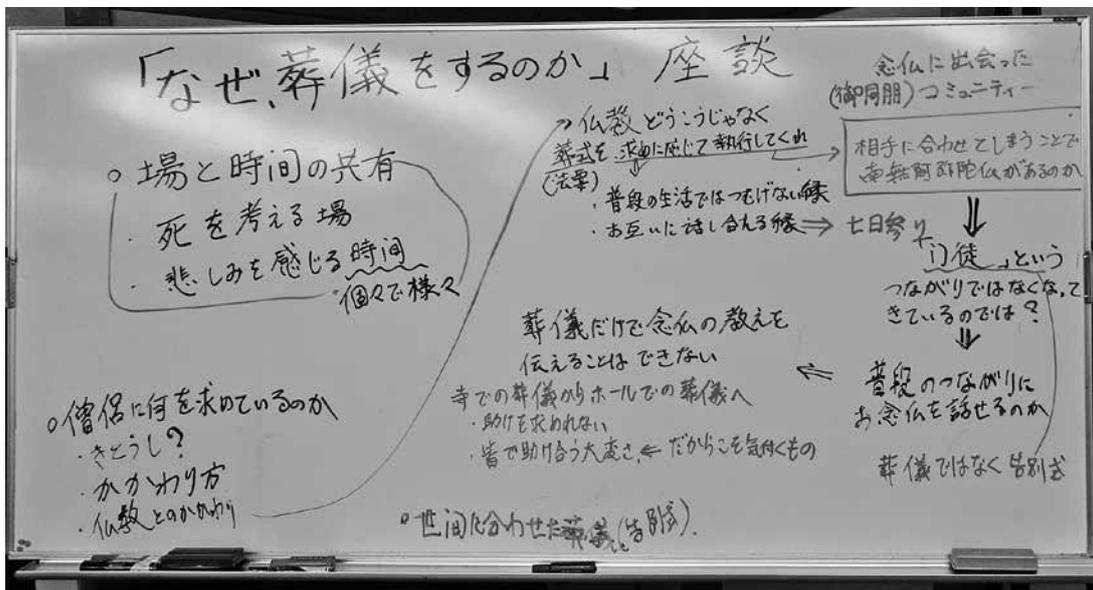
H 葬儀には地域性が多く反映されてきたのも事実でしょう。一方儀式の形を変えろといっても簡略化して楽な方に流れていくことで大切な教えをなくしてしまうのは駄目です。このようながながと続くことで儀式の形骸化が進んでいくのではないかと思います。

まとめ

「なぜ葬儀をするのか」というテーマから実際

の我々の姿勢が問われていく内容へと展開していった座談でした。相手の中に今までに無かった考え方を求めていく在り方は、お互いに慣れるまで違和感を感じるのは仕方ないのかもしれない。講義の中では葬儀が告別式になってきているが、情だけで終わるものではないという話がありました。しかしそれを伝えていくのは葬儀の場だけでなく様々な場で、語り合える関係性を築いていけるかという課題が浮き彫りになっていきました。かつての葬儀は地域や親戚の方々、多くのご縁によって支えられてきました。時代の推移と共に葬儀に携わるご縁や手伝いが僧侶側も遺族の方々も少なくなり、これまでもあった死と向き合う感覚も変わっていったのかもしれない。

この座談だけで答えが出るものではありません。むしろ問い続けていくことが我々には求められています。一方で、伝えていかなければ何も残っていきません。僧侶側の思いが伝わりなくとも丁寧に向き合っていくことの大切さを再認識していく場となりました。



帰敬式学習会

会場 富山別院本堂・富山東別院会館

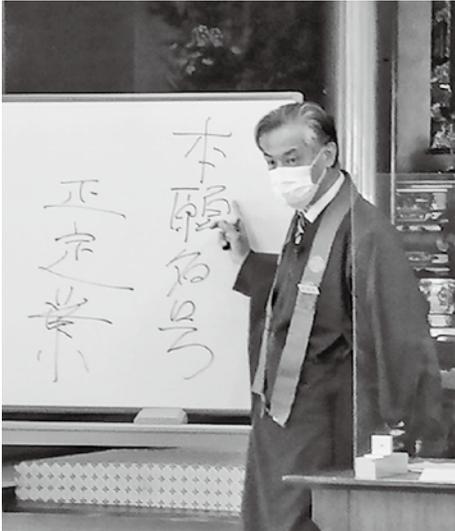
【二〇二二年三月九日】

教区の帰敬式実践運動推進計画の一環として、講師に高桑敬和氏（金沢教務所長）にご出

向いただき、「帰敬式学習会」を開催しました。

学習会は二部構成で、第一部では帰敬式の歴史や願いについて理解を深め、第二部では模擬帰敬式を行って、自坊で帰敬式を執行する際の要点を確認しました。

帰敬式実践運動については教区内の僧侶や門徒の関心も高く、新型コロナウイルス感染症対策の為に定めた会場の人数制限いっぱい参加者が、熱心に受講していました。



第一部 前半「講義」

（講義の要旨）

明治九年の「宗規綱領」で初めて帰敬式と呼ばれるようになりました。それ以前は剃髪式や剃度式と呼んでいました。

かつて明治政府は神道国教化政策を推し進めていく中において廃仏毀釈を行いました。明治五年には宗教統制による国民教化を目的に教部省が設置され、寺院・神社を管理しました。僧侶・神職等は教導職を任せられ、「三条教則」（敬神愛国ノ旨ヲ体スベキ事・天理神明ヲ明ニスベキ事・皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守スベキ事）を広める役割が与えられました。

三条教則により大教宣布を任せられた仏教各宗は合同で大教院を設立しましたが、本尊として仏像を安置することが許されず、仏教教義を宣伝することを禁止され、国民に尊皇愛国思想の教化を強いられました。

そのような国の政策に反発し、明治八年、真宗四派（東西本願寺派・高田派・木辺派）は大教院を離脱し、教部省の宗規制定通達に対して提出したのが「宗規綱領」です。

なぜ帰敬式をするかということについて、「宗規綱領」には、「帰敬ノ誠ヲ表スル」のだとあります。そして帰敬式を行う際は、「改悔文」を唱

え、「観彼如来本願力ノ文」を唱えると書かれています。つまりこの帰敬式が示すものは、「真宗門徒の掟・生活を取り戻してください」という意味だと私は捉えています。

なぜ帰敬式を受けなければならぬのかというと、真宗門徒の生活を行えということです。「正信偈」に「本願名号正定業」とあります。本願の名号によって私の生活を正しくなしていきたいということなのです。本願名号をいただくことでたった一度の人生をなすとげていきたい、そう



「生き方を名告る名前をいただく式が帰敬式だと考えます。」

「煩惱にまみれた私たちに対して、本願名号が定まり、生活となり、仏の種となっていく人生を送ってください」という名前が法名であります。そこに帰敬式の意義があるのでしょう。」

第一部 後半 「座談」

(座談で出た主な意見)

○講義の感想

- ・ 帰敬式の歴史的な背景や位置づけがわかりよかつた。
- ・ 門徒としては難しいお話だった。
- ・ 作法等のことを知りたいと思って来たので、この後の模擬帰敬式に期待している。

○帰敬式の意義

- ・ 推進員養成講座を受けた者として、ご縁を他者に広げていく立場にあるのだが、実際は身近な方々にも伝えるのが現況。
- ・ 推進員になって法名をいただいたこととお寺に行きやすい気持ちにはなれた。
- ・ 帰敬式を受式し、聞法生活のスタートに立つと言いつつ、実際は法名を受けることがゴールになってしまっている方が多いのでは。
- ・ 人生で感じる矛盾：幼い頃に道徳を学んで

「も、世の中の損得の感覚に触れて流されていくと信じるべきものが分からなくなることもある。だからこそ自らを明らかにしていく教えとして開かれていくのでは。」

○法名

- ・ 名前に含まれる文字を扱った法名を選定したが、本来は經典の言葉を用いるべき。
- ・ お通夜の法話で法名の意味を、四十九日の法話ではその由来の典故等をお話ししている。
- ・ お申いの際にお剃刀をする際には、「本来はご生前に受けるべきですよ」ということを伝えていく。



第二部 「模擬帰敬式」

(第二部の流れ)

- ① 「帰敬式執行の手引き―帰敬式実践運動の更なる推進に向けて―」を参照しながら、代表者六名が、執行者・掛役・受式者に扮し、自坊における帰敬式執行の流れを確認した。
- ※帰敬式部分のみ。学習会や本山への手続き等の部分についての研修は割愛。



- ② 模擬帰敬式終了後、講師から気になった所作等の指摘及び自坊で執行する際の留意点について助言をいただいた。

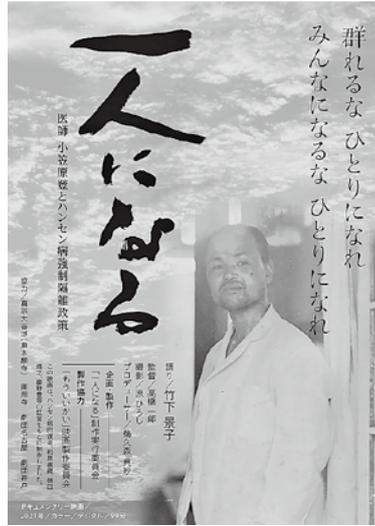
- ③ 質疑応答 (第二部で確認した事柄など) 会場の大きさや備品等によって『手引き』のようにできない場合もある。また『手引き』では執行者と掛役で役割分担しているが、住職一人で行う場合も多いと思う。実情に合わ

- ・ せて柔軟に対応してよいのではないかと思う。
- ・ お剃刀前には法名は掲げない。お剃刀はお通夜の前に済ませておく。
- ・ 定められた手順で手続きを行う。特に法名紙

映画『一人になる』を観て

二〇二二年四月十九日

会場 富山東別院本堂



小笠原医師を描いたこのドキュメンタリー映画上映の呼びかけには、「群れるな…みんなになるな…」という言葉が置かれている。

ハンセン病患者さん、そしてその家族に多大な苦しみを与え、今なお与え続けている「強制隔離政策」。しかし、この政策でさえも「みんなになって群れる」時、それはごく普通の事柄に

- の取り扱いには十分注意すること。
- ・ 一九九六年以降の受式者は本山でデータ管理されており、法名の照会が可能。
- ・ 生前に院号法名を願う場合、先に帰敬式を受

なってしまうのではないか、ということを感じました。

特に、私が国の一員という群れにすっぽり入る時、ハンセン病の人を見つげ出し、隔離していくことは、ごく当たり前のことになるのではないだろうか。この政策に異を唱える者を「国賊」と呼ぶことにはそのことが強く表れていると思います。

では何故、小笠原医師は「一人になる」ことが出来たのか？そこに「依り処」ということをあらためて考えさせられました。宗教では当たり前のように使われるこの言葉だが、あなたは何を依り処としているのかということ問われていると感じました。

第十組 浄光寺 齊藤 弘顕

二〇一九年に、ハンセン病問題全国交流集会在富山で開催され「業」について学んできました。ハンセン病は業病と言われ、前世の悪業の報いによって起こる病とされてきたという事実をあらためて自分の中で考えるきっかけとなり

- 式していることが前提。
- ・ 会場に来られない受式希望者がいる時、自宅や病室に赴いて執行することもある。

ました。

今回の映画『一人になる』は、僧侶であり医師であった小笠原登氏の足跡をたどったドキュメント映画。

今日までハンセン病患者が民族浄化、国民の恥辱ということ、国策のため強制隔離された生活の苦悩等の話を伺ってきましたが、病を治す医師の視点からの思いをみさせていただきました。

一人の医師が国を相手に戦うわけでもなく、ただ、ひたすらに患者に向き合い病を治そう、一人でも多く療養所に入所させないで、という患者一人ひとりに寄り添う一人の人間の姿が表わされていた映画でした。

― 群れるな ひとりになれ

みんなになるな ひとりになれ ―

今の自分が問われているように思えました。

第十組 覺證寺 館 朋子

富山教区団体参拝 二〇二二年六月八日
五箇山の念仏を訪ねて

会場 五箇山・行徳寺他

先日、富山教区の団体参拝に参加させていただき、五箇山の行徳寺（赤尾道宗が開基）を訪ねました。

道宗さんについては、事前に資料をいただいていたのですが、あの山深い赤尾谷から三十五キロの道のりを、雨の日も雪の日も、月に一度瑞泉寺まで通われた道宗の信心とは何か……気になっていました。それは生い立ちにあるのだと知りました。四歳で母と、十三歳で父と死別し、一人残された道宗はいつも父母の面影を探しながら、苦悩の日々だったのではとお聞きしました。やがて蓮如上人との機縁が結ばれて、深く仏法に寄り添う道宗さんになられたのでしょう。

バスの窓から両脇の山々を眺め、そして道宗道を通してみて感慨深いものがありました。

第十一組 養照寺門徒 久世 キヲ

富山教区からの案内で先日五箇山巡拝へ行ってきました。城端生まれの私は、懐かしく思い参加しました。

まず赤尾の道宗のお寺へ行きました。ここは五十年以上前に来て泊ったように覚えているだけで、あとは何も覚えていません。初めて来たのと同じでした。

住職の御母堂様から、お寺の説明をお聞きしました。お寺の歴史と現状を話されそのあと「信心」の話までされました。我々はお寺の関係者と知つてのことでしょうが、「信心」まで話される方は少ないと思いました。

私が育った家の南側に東西の連なる山脈があります。そこに雪解け頃に一本の道のような筋ができます。その筋を祖父たちは道宗さんが歩かれた道、道宗道と呼んでいたことを思い出します。ついでに思い出したのは昭和の終わりごろ、井波の方がその道宗道を旧暦の十二月三十日に歩こうと挑戦されたことでした。

次に、相倉集落の念仏道場へ行きました。みなさん一心に道場を守って、世話をしておられます。頭が下がります。

最後に城端別院へ。亀淵輪番は、以前に富山別院におられたこともあったからか、特に厚意

をもって丁寧案内をしてくださいました。自分の意思でこの行事に参加したのですが、それ以上に何かに押し出されるような巡拝の旅でした。

第九組 同朋の会 坂田 求



書籍紹介

編集委員がこれまで読んだ本の中で、心に残った本を紹介していきます。

「死んでいくということを甘んじて受け入れるということは、何も、命を粗末にしていいということではなくて、逆に生きておるといのは自分の意志で生きているのではなくて、生かされておるとい感謝の気持ちと表裏一体なんですね。……現地のほうがいかに豊かである……。人が生きて、死ぬということの意味を日本人は忘れてるんじゃないかという気がするんですね。」

「われわれが考えてきた、進歩だとか、近代化というのが、本当に幸せに繋がるかどうかわからないなという感じが、このごろしてならないんです。」

「日本の皆さん、それからアメリカの人々に訴えたいのは、軍事活動でよくなった地域は一つもなかったということ……。」

(一部抜粋)

1984年からパキスタンのペルシャワールに拠点を置き、パキスタンとアフガニスタン両国のハンセン病患者や貧困層、難民、山岳民族などの医療を支援しながら、またアフガニスタンの水源確保のための灌漑水路の建設や農地の復帰に力を尽くされた中村哲医師が、NHKのラジオ番組のインタビューに答えた内容をまとめた一冊である。本書には、中村氏の現地での生活、活動を通しての感慨や本音が、優しい口調で率直に丁寧に語られている。

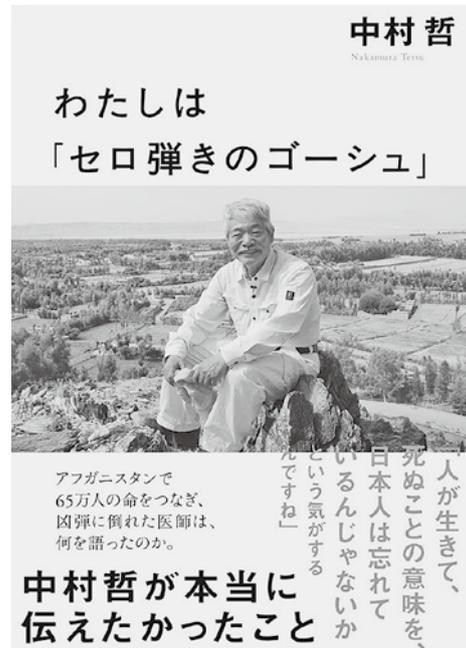
「医療、経済、教育の格差問題」、「貧困問題」、「難民問題」、「生活支援や復興支援の本質」、「内戦・紛争・テロの問題」、「環境問題」、「食糧と水の問題」。今国際社会が抱えている数多くの問題が顕在化していると言えるアフガニスタン、パキスタンの現実。「善か悪か」「正しいか誤りか」という乱暴なものさしでははかりきれない現地の人々の姿には、親鸞聖人が法難によって流罪になり出会っていかれた「るなかの人々」の姿が重なって見える。私たちがパキスタンやアフガニスタンという国に抱いている印象や誤解・偏見を見直しさせられると同時に、私たち日本人や先進国の独善的な在り方を突きつけられる。そして、なにより「人とは何か?」「善とは?悪とは?」「生きるとは?」「平和とは?」という問題がその根底にあることを投げかけてくる。

中村氏の活動には、どこか「御同朋・御同行」に通じる生き方が感じられる。

近代文明に埋没し、文明の利器の便利さを当たり前として生活し、「いのち」ということ、「生きる」ということの本質と向き合っていない自分自身の有様。中村氏の言葉は「人が生きる」ということの本物のすがたを、静かに語っているようである。言葉一つひとつが胸に突き刺さる。

残念ながら、彼は2019年12月にテロ組織に襲撃され73歳で亡くなった。非常に悔やまれるところである。

(第九組 光圓寺 安川 潤)



わたしは「ゼロ弾きのゴーシュ」

—中村哲が本当に伝えたかったこと—

中村 哲 著 NHK 出版

お寺紹介

濱の御坊

北海山 稱永寺

(滑川市常盤町)

今回は第十一組稱永寺の住職に
お話を伺いました。



稱永寺に伝わるところによれば、初代の蝮川新左衛門政成(浄念)が明応二(一四九三)年、現在の滑川市大町付近に小城を築いて住んだことが開基とされる。

三代の政基(浄尊)が慶長一〇(一六〇七)年、寺号・木仏本尊(現在安置のご本尊)を賜ってから後、本願寺東西分派の折に教如上人側で尽力したことにより「濱の御坊」と称されるように。(当時の稱永寺は海岸に近接していたため。その後激しい海岸浸蝕により寺の跡地は現在海の中です)

その後加賀藩の要請により武平太町へ移転したが、十三代賢了の時代に一代で三度の類焼に遭い、万延元(二八六〇)年現在の地、常盤町へ。現在の本堂は十五代静賢により明治二十四(一八九二)年建立されました。



境内地に句仏上人(東本願寺二十三代影如上人)の歌碑があります。十六代の龍夫の得度のお祝いにといただいた句であるとのこと。

「稲刈りぬ 三冬を越は 法楽に」



寺号額と本堂の欄間彫刻

(三誓偈の四句「我建超世願 必至無上道 斯願不満足 誓不成正覚」)

教区だより

(敬称略)

宗派経常費

完納御礼

二〇二一年度宗派経常費を御完納いただき誠にありがとうございました。ここに完納寺院を披露申し上げます。御礼にかえさせていただきます。

(二〇二一年七月一日～二〇二二年六月三十日)

善久寺 長龍寺 極性寺 常念寺 覺順寺 常徳寺 圓乗寺 光曉寺 勝樂寺 等覺寺

正願寺 正源寺 善教寺 善性寺 徳蓮寺 唯信寺 榮明寺 安成寺 照善寺 佛教寺

寶藏寺 報光寺 養願寺 本行寺 了照寺 敬恩寺 專正寺 眞宗寺 相順寺 大徳寺

蓮光寺 專福寺 西元寺 浄光寺 乘善寺 常願寺 得性寺 勝福寺 則善寺 佛現寺

長福寺 唯見寺 傳長寺 持專寺 念法寺 願宗寺 正信寺 光徳寺 得念寺 西照寺

誓願寺 眞行寺 眞成寺 西源寺 照念寺 長樹寺 願樂寺 明喜寺 浄永寺 本傳寺

辻徳法寺 明源寺 心行寺 長安寺 善念寺

稱永寺 眞證寺 專廣寺 養照寺 專入寺 長寶寺 願蓮寺 願生寺

廣際寺 本廣寺 教正寺 西光寺 光念寺 樹徳寺 養照寺 明願寺 專徳寺 浄慶寺

善行寺 入覺寺 正樂寺 佛念寺 立尅寺 持專寺 圓林寺 光誓寺 明榮寺 雲龍寺

圓照寺 竹願寺 光徳寺 玉永寺 善覺寺 善龍寺 光泉寺 念興寺 興行寺 西養寺

正專寺 稱念寺 浄誓寺 光顕寺 圓満寺 養現寺 本龍寺 願龍寺 龍照寺 長願寺

本敬寺 松林寺 願行寺 西養寺 眞敬寺 大安寺 明誓寺 常光寺 勝蓮寺 蓮通寺

圓常寺 浄信寺 無量寺 浄恵寺 等通寺 善念寺 常泉寺 善久寺 正覺寺 明光寺

光明寺 正恩寺 常念寺 照光寺 願成寺 眞浄寺 眞友寺 光榮寺 榮顔寺 西順寺

祐教寺 岩隆寺 光照寺 改観寺

第十二組 託法寺 神久寺 圓覺寺 常念寺 長圓寺

第十組 圓命寺 正覺寺 覺證寺 聞成寺 蓮照寺 福恩寺 正覺寺 永福寺 応声寺 浄行寺 慶念寺 專福寺 専琳寺 満念寺 永宗寺

第九組 西光寺 光圓寺 西光寺 中堂寺 寶林寺 寶堂寺 永源寺 西圓寺 善通寺 禮行寺 速成寺 本覺寺 護念寺 深妙寺 樂圓寺 慶正寺 尊光寺 康樂寺 圓龍寺 長光寺

第十組 圓命寺 正覺寺 覺證寺 聞成寺 蓮照寺

福恩寺 正覺寺 永福寺 応声寺 浄行寺

慶念寺 專福寺 専琳寺 満念寺 永宗寺

第十二組 託法寺 神久寺 圓覺寺 常念寺 長圓寺

祐教寺 岩隆寺 光照寺 改観寺

第十組 圓命寺 正覺寺 覺證寺 聞成寺 蓮照寺

福恩寺 正覺寺 永福寺 応声寺 浄行寺

慶念寺 專福寺 専琳寺 満念寺 永宗寺

住職就任

(二〇二二年一月一日～二〇二二年六月三十日)

二〇二二年二月二十八日

第十組 報光寺 入部 晃純

二〇二二年四月二十八日

第十組 專福寺 今湊 晃

二〇二二年四月二十八日

第十一組 佛念寺 神涼 崇昭

第十二組 願樂寺 永井 誠了

教師補任

(二〇二二年七月一日～二〇二二年六月三十日)

二〇二二年一月十七日

第九組 深妙寺 田辺 朋耶

二〇二二年三月二十五日

第十組 浄光寺 川原 稔

第十一組 浄徳寺 佐々 阿都姫

教化日誌

(二〇二二年一月一日～二〇二二年六月三十日)

1月

1日 初参り・初鐘の集い

12日 『如大地』編集会議

15日 ご命日のつどい【北島 昭彦】

17日 解放運動推進協議会

20日 あいあう会

25日 第九組組会

27日 第十組組会

28日 第十一組組会

2月

1日 第十一組組門徒会

2日 第十二組組会

3日 『如大地』編集会議

4日 教区教化委員会「社会教化小委員会」

8日 第十三組組会

9日 第十二組組門徒会【中止】

10日 新宗教に関する研修会実行委員会

15日 御命日のつどい【桃井 量純】

16日 第十三組組門徒会

21日 解放運動推進協議会

3月

2日 秋安居事前学習会①

3日 教区坊守開法講座【中止】

6日 青少年のつどい【中止】

8日 教区教化委員会「社会教化小委員会」

9日 婦敬式学習会【高桑 敬和】

10日 秋安居事前学習会②

11日 東日本大震災「わすれな鐘・追弔法要」

15日 収骨奉仕団（16日）【中止】

御命日のつどい【大伴 慎介】・奉仕研修

17日 教区教化委員会「門徒研修小委員会」

18日 秋安居事前学習会③

20日 富山別院彼岸会【渡邊 智子】

21日 〃 【土肥 人史】

22日 〃 【斎藤 研】

23日 秋安居事前学習会④

得度必須事前研修会

24日 児童教化連盟映画「ちむぐりさ」上映会

25日 門徒・寺族総合研修会

30日 得度必須研修会（31日）

4月

1日 真宗本廟「春の法要」（4日）※ライブ配信

4日 教区教化委員会「社会教化小委員会」

5日 教区教化委員会「門徒研修小委員会」

7日 秋安居事前学習会⑤

富山教区宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業推進委員会

12日 秋安居（13日）【延塚 知道】

15日 御命日のつどい【和田 度】

解放運動推進協議会

19日 解放運動推進協議会公開講座【小松 裕子】

20日 『如大地』編集会議

28日 教区坊守会開法講座【水嶋 聡】

5月

1日 五一会（教区内物故住職追恩法要）

9日 教区教化委員会「青少年教化小委員会」

11日 教区坊守会報恩講【北島 昭彦】

12日 教区教化委員会「社会教化小委員会」

6月

- 15日 御命日のつどい【星川 了】
- 17日 『如大地』編集会議
- 19日 富山教区宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業推進委員会
教区教化委員会「組織拡充小委員会」
- 20日 新宗教研修会【瓜生 崇】
- 23日 社会問題研修会【二階堂 行壽】
- 30日 共学研修会
- 2日 教区同朋総会【中山 郁英】
- 4日 第十三組同朋大会【木村 宣彰】
- 5日 第九組同朋大会【高栗 敬和】
- 6日 教区教化委員会「門徒研修小委員会」
- 7日 解放運動推進協議会
- 8日 教区教化委員会「寺院研修小委員会」
- 8日 教区団体参拝【五箇山】
- 8日 解放連「総会・部落問題講演会」【上杉 聡】
- 9日 あいあう会
- 10日 合唱「コール菩提樹」練習
- 11日 第十二組同朋大会【瓜生 崇】
- 13日 教区教化委員会「組織拡充小委員会」
- 15日 御命日のつどい【辻 明浩】
- 『如大地』編集会議
- 18日 第十一組同朋大会【木村 宣彰】
- 21日 教区教化委員会「総会」
- 22日 第十組同朋大会【日野 賢之】
- 28日 富山教区宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業推進委員会
- 29日 共学研修会【佐野 明弘】

敬 弔

ご生前のご功労を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。

(二〇二二年一月一日～二〇二二年六月三十日)

《前任職・住職》

- 第十三組 浄慶寺 前任職 安部 英 淳
二〇二二年 二月十七日 寂
- 第十二組 西照寺 住職 星 谷 多賀夫
二〇二二年 二月二十五日 寂
- 第十三組 明光寺 前任職 野 田 龍 俊
二〇二二年 三月 六 日 寂
- 第十二組 託法寺 前任職 華藏閣 行 惠
二〇二二年 六月二十四日 寂
- 《前坊守・坊守》
- 第十一組 祐教寺 前坊守 佐 伯 葉 子
二〇二二年 二月二十二日 寂

書籍のご案内

昨年度、新たに左記書籍を購入いたしました。
既存の書籍とともに閲覧及び貸出が出来ます。
ご利用ください。

種別	図 書 名
書籍	「教行信証化身度巻講義」第2巻
	改めて經典の「施陀羅」差別に問う 宗祖・親鸞聖人を差別の盾に使う詭弁 月刊誌『住職』
紙芝居	勿忘の刻
	ふたりのパンタカ しんらんさまと白い道 あみださまのたんごぶ 七高僧ものがたり
DVD	親鸞への道／八太のともだち
	アニメでふれるほつげさまのいろいろ 念仏申す生活を 念仏成仏これ真宗
法 話	一人の尊さ
	非僧非俗 濁世の機

寺院解散

(二〇二二年七月一日～二〇二二年九月三十日)

二〇二二年十月二十日	第十組 淨林寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)
二〇二二年十月二十五日	第十一組 淨教寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)
二〇二二年二月二十四日	第十三組 重願寺	解散登記完了
二〇二二年五月十七日	第十一組 安養寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)
二〇二二年六月八日	第十一組 淨恵寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)
二〇二二年六月十七日	第十三組 泉照寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)
二〇二二年六月二十七日	第十三組 養現寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)
二〇二二年六月二十九日	第十一組 順正寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)
二〇二二年七月八日	第十組 安正寺	解散登記完了
二〇二二年八月二十二日	第十三組 佛性寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)
二〇二二年九月五日	第十一組 圓寶寺	清算結了登記完了 (寺籍削除)

編集後記

今年、すでに六月の時点で気温が三十五度を超える日があった。メディアでも例年よりも早く熱中症の話題が出ているように感じられた。七月に入ってから、そこに追い打ちをかけるようにコロナの感染者が増えているという報道も耳にするようになった。

以前と比べて明らかに人の流れが活発になり、私自身も以前までは不要不急の外出は控えていたが、最近は温泉に行ったり、外食をしたりと、外に出ることが多くなった。しかし、感染者数が増えているとひとたび耳にすると、気を緩めすぎたのではないかと反省する。

私たちは、自分を緩めすぎたのではないかと反省しているが、どれだけ近くを見ても自分自身の姿は見えない。気の緩みはそのわかりやすい例だと思う。それをときどき気づかせてくれるのが、日々のお勤めでもある「南無阿弥陀仏」ではないだろうか。人との関わりも少しずつ増えてきている。一方通行の主張ではなく、相手との「対話」を意識して話したい。

春先までは、気候がよく、過ごしやすかった。家の片づけをすることが多かったが、そこでも家族との衝突がよく発生していた。ものの置き場所や、掃除のやり方、捨てるか捨てないかなど、細かいこととで言い合いになる。歩み寄りながら片づけをしようと考えても、それは結果として不本意な結果を受け入れることになるため、どうしても衝突が起こる。一段落ついてしまえば反省もできるが、リアルタイムではなかなか難しい。

さて、『如大地』は今号で百五十一号を迎える。前号で委員一同が『如大地』は広報誌であるということを再度確認しあい、それを忘れずに、時代に合わせたものへと変わっていくことの重要性を感じている。これまでに原稿を寄稿いただいた方々、ご意見を聞かせてくださった方々、過去に委員として編集に熱心に取り組んでくれた方々など、多くの人たちのおかげでここまで続けてこられたことに感謝する。

来年は教区改編があり、今後の『如大地』の活動をどうするかも決めていく必要がある。どのようなかたちであれ、ひとりでも多くの読者から望まれる広報誌を今後も発行していきたいという思いを胸に『如大地』の編集に臨む所存である。

第十二組 勝樂寺 藤田 徹

『如大地』第151号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。